

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720260

研究課題名（和文） 中国建国初期、江南郷鎮社会の再編に関する現地調査

研究課題名（英文） A Field Survey on Reorganization of Market Society in Jiangnan Delta in the Early People's Republic of China.

研究代表者

佐藤 仁史（SATO YOSHIFUMI）

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：60335156

研究成果の概要（和文）：

本研究課題によって得られた成果は、近代における江南市鎮の機能、市鎮と社村との関係、社村内部の構成と関係などに関する実態解明であり、これにより近代江南農村空間の重層性について新たな知見を示した点が、研究史上の貢献であると言える。また、極めて開放的な性質を有した江南社会が、土地改革や社会主義改造、集団化によってどのように再編されたのかに関する基礎的データを収集したことも、今後の研究の展開のために必要不可欠の基礎作業であると位置づけることができる。

研究成果の概要（英文）：

In the course of this research project, I examined market towns and rural areas of the Yangtze River Delta. Having analyzed the functions of market towns, the connections between market towns and rural areas, and village organizations and their functions, my research demonstrates the multi-layered nature of rural space in the Jiangnan region, a significant contribution to the field. Additionally, I have collected basic historical materials concerning the ways in which land reform, socialist reform and collectivization have transformed the extremely open character of Jiangnan society. These materials will be useful, if not essential, to future researchers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：中国近現代史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：江南、市鎮社会、オーラルヒストリー、現地調査、土地改革、地方文献

1. 研究開始当初の背景

（1）研究代表者の研究の全体構想は、1949年以前の「伝統中国」期における江南デルタ農村の特徴を「郷鎮社会」（福武直が夙に指

摘した「町村共同体」とほぼ同義であり、商工業集落である市鎮を中心としてその周辺農村を含んで形成された地域社会）ととらえた上で、20世紀中葉における江南デルタ農

村社会の国家による再編過程と構造変動とを分析することを通して、中国における国家—社会関係の変容過程を解明することを主眼としている。従来の研究においては主に次の2点について検討を加えてきた。すなわち、①市鎮社会を主導した在地指導層・知識人の分析を通じて、清末民国期の国家による地方の制度化が地方政治や郷土意識にもたらした影響、②従来自治に委ねられていた村落レベルの基層社会の構成や慣習が地方の制度化や国家の浸透に伴ってどのように変容したのか、である。その結果、従来経済的・文化的統合体であった郷鎮社会が行政単位としての諸機構を整備していく過程で、郷鎮から国家へと連続する郷土意識を生み出していたこと、その一方、国家機構の浸透は大規模な市鎮に限定されていたことを明らかにした。

(2) 清末民国期の市鎮在住の指導層が地域統合に果たした役割や彼らの郷土意識の特質については、2003・2004 年度科学研究費補助金若手研究B「清末民国期江南市鎮の指導層と地域統合に関する基礎的研究」によって県級の所蔵機関の調査を行い、少なからぬ地方文献を収集した。うち、『新盛沢』『盛沢』『盛涇』などの地方新聞を利用して基礎的な考察を行った。また、文献による分析が困難な村落社会の実態については、2006-2008 年度科学研究費補助金若手研究B「清末民国期、江南デルタ農村の地域統合と民間信仰に関する基礎的研究」において、濱島敦俊氏の成果や手法を敷衍してヒアリング調査を実施し、「社」という村落レベルの文化的社会的統合を検討した。

(3) 上述の研究過程において痛感するに至ったのは、時間軸を中国建国後から 1970 年代にまで伸ばして研究の空白を埋めると同時に、明清期から改革開放期までにおける長期的な変容を通時的に分析することで、郷鎮社会の変化した側面は何か、長期間にわたり社会に通底する要素とは何かを理解する必要性である。以上が本研究課題を着想するに至った経緯である。

2. 研究の目的

(1) 研究目的は、伝統中国期についての研究蓄積を継承した上で、従来の歴史学研究において殆ど俎上にのせられることのなかった中国建国前後の郷鎮社会の再編過程を解明するための基礎作業を行うことである。したがって、本研究は、中華人民共和国建国以降の党国体制による地域社会の再編過程を主要課題とした。すなわち、明清期以来の伝統社会としての性質を強く残していた「郷鎮社会」が、1950 年代の土地改革、社会主義

改造や集団化によってどのように再編され、そのことが基層社会の生活に何をもたらしたのかを分析するというものである。

(2) 1949 年前後の市鎮社会、「社」村、そして相互の関係の変化について、文献史料と非文献史料という性質の異なる史料から複眼的にアプローチすることである。前者については、県級の檔案館・図書館に所蔵されている公文書や種々の地方文献を利用して解明することを目指す。後者については、幹部経験者を中心とする老農民に口述調査を実施すると同時に、江南農村の現況について市街の地理学的調査をはじめとする景観調査などのフィールドワークを実施し、遡及的に近現代江南農村を理解することを試みる。このことは、ひいては伝統中国期における郷鎮社会の特徴を理解するために大いに裨益すると思われる。

3. 研究の方法

(1) 市鎮そのものにせよ、村落にせよ、基層社会の実態を伝える文献資料は極めて限定されていたことが、本テーマに関連する研究が進展しなかった要因であった。この問題点に鑑み、本研究課題においては次の2点によって史料上の限界を克服せんと試みた。第1は、県級の檔案館・図書館に所蔵されている公文書や種々の地方文献などこれまで殆ど利用されてこなかった文献史料群を蒐集・利用した点である。第2は、口述調査や景観調査、個人蔵史料の収集など広い意味でのフィールドワークの成果を研究に導入した点である。

(2) 地方文献の収集

本研究開始以前に既に収集していた新聞資料(『蘇州明報』『吳江報』『新盛沢』『盛沢』『盛涇』)から関連記事を抽出する作業を進めると同時に、『蘇南日報』『新蘇州報』などから記事の収集を行った。また、吳江市檔案館・図書館、蘇州市 檔案館、蘇州市方志館、湖州市檔案館、建徳市檔案館で、檔案や文史資料などの精査・収集を実施した。

(3) フィールドワーク

- ①口述調査 2004 年以来調査を継続しているいくつかの定点観測村落において、老幹部や老農民に口述調査を実施した。解放前の状況を知る老人は既に 80 歳を超えており、聴き取り調査は急務である。加えて、松江区富林村での集中的調査を行った。当該村は中国建国初頭まではもっとも基層の市鎮であったため、本研究課題にとって極めて興味深い調査対象である。
- ②景観調査 文献史料に断片的に登場する市鎮の景観や文化的統合の中心となる寺

廟・村廟について実地検分を行い、地理情報や由来についての基礎情報を得た。

③個人蔵史料の調査 幹部経験者宅に保管されている公文書の写しや族譜などの調査・撮影を行った。

4. 研究成果

(1) 本研究課題において得られた成果を総括すれば、①市鎮社会と村落社会との関係について、市鎮と村落の双方の立場からそれぞれアプローチをし、従来必ずしも十分ではなかった相互関係と変容について解明するための基礎的な史実を得たこと、②郷鎮志に依拠して研究が進められてきた市鎮社会に比して、文献史料が殆ど存在しなかった「社」レベルの基層社会の実態に深く切り込むことができたこと、の2点である。

①についていえば、県級の所蔵機関に所蔵されている公文書、新編郷鎮志、文史資料を博搜した上で、現地調査によって文献史料を補う口碑資料を得ることができた。特に、市場システムにおいて再基層に位置する市場町である旧広富林鎮における調査によって、農村商工業化の実態、市場圏・生活圏・信仰圏・教育圏など地域社会の空間構造を分析する貴重な情報を入手することに成功した。濱島敦俊氏によって指摘されている県一市鎮一社村という江南社会の三層構造モデルを相対化して重層的空間性を理解することにつながると思われる。

②についていえば、社村内部の構成や機能、社会関係の特徴についてである。概していえば、江南農村に「村落共同体」を見出すことは極めて困難であるが、それではいかなる社会関係を有し、そこにはいかなる共同性が存在していたのかを解明する上で不可避の問題である。本研究によって浮かび上がってきたのは、村内部の地縁組織である「段」、家族や婚姻関係、個人的な関係、純然たる経済関係という様々な関係の網の中で行動する農民の社会関係の特徴である。どの関係や組織においても村民たちを排他的に規制する装置となりえずあくまでも緩やかな共同性であったこと、土地売買、金銭の貸借、水利などの側面においても、個別に築かれた関係に基づいていた点にも商業化が高度に進展した江南農村の特徴を見いだすことができると指摘した(佐藤仁史「民国期江南の廟会組織と村落社会——吳江市における口述調査を中心に」『近きに在りて』55号、2009年)。

(2) 本研究における方法論上の重点の1つに地方文献史料の蒐集と活用がある。江蘇省吳江市と上海市青浦区、江蘇省蘇州市、浙江省嘉興市、浙江省湖州市における市級・県級の檔案館・図書館において、地方志、地方新聞、地方檔案の調査・蒐集を実施した。その

結果、『吳江日報』(吳江図書館)『菱湖日報』『導報』(湖州檔案館)といった地方新聞、『南潯鎮新志』『南潯鎮図志』(湖州図書館)といった地方志、『双林沈氏家譜』『双林姚氏家乘』『竹溪沈氏家乘』(湖州檔案館)といった族譜を複写・撮影した。

文献史料について附言しなければならないのが、フィールドワークの過程において偶然入手した個人蔵資料についてである。ある老幹部は土地改革幹部や生産大隊支部書記を務めた際にやりとりをした公文書の写しを自宅に保管しており、研究代表者はそれらを閲覧する幸運に恵まれた。また、村のある一族の族譜や有力一族のメンバーによって記された家史・村史の草稿、1990年代以降村廟で開催される廟会の収支簿なども閲覧できた。これらは村落社会のマイクロ分析にとって極めて貴重な史料である(佐藤仁史「フィールドワークと近現代江南農村——太湖流域社会史調査に即して」高田幸男・大澤肇編『新史料からみる中国現代史——口述・電子化・地方文献』東方書店、2010年)。

(3) 方法論上のもう1つの成果は口述調査によるものである。本研究課題における特徴は、老農村幹部ばかりでなく、一般の老農民や、宗教的職能者、藝人、漁民による進行組織の「香頭」(リーダー)、漁民、市鎮住民など社会の周縁にいた人々にも調査を実施し、在地社会を多面的複眼的にとらえて検証した点といえる。主要調査地点は、吳江市大長港村を中心として、上海市松江区新陳家村・陳坊橋漁業村などである。大長港村においては、新中国成立以前の地縁組織と無尽講に類似した慣習、土地改革の実態、集団化期における副業や都市一農村関係について詳細な口碑を得ることができた。また、陳坊橋漁業村の漁民に対して、漁業改革、陸上定居、生業と信仰などの実態を具にヒアリングを行った。水上世界の角度から陸上世界を複眼的に解明する上でも重要な作業であると言える。

口述調査のうち、農村間や市鎮一農村間を行き来し、江南農村の民俗生活を理解する上で結節点ともなる宣卷芸人に対するものについては、話し手や現地協力者の同意・協力を得て口述記録集として刊行した(佐藤仁史・太田出・藤野真子・緒方賢一・朱火生編著『中国農村の民間藝能——太湖流域社会史口述記録集2』汲古書院、2011年)。なお、『東方』に書評が掲載され、高い評価を得ている。加えて、『中国研究月報』『歴史学研究』などにも書評・紹介が掲載される予定である。

(4) 方法としての口述調査についても、新たな進展がみられたことを指摘しなくてはならない。中国近現代農村史の領域において、

口述調査や口碑資料を利用した分析・研究は1980年代より進められており、とりたてて目新しいものとはいえない。しかしながら、本研究においては、口述記録を単なる史料として捉える従来の方法から一歩進め、社会学や民俗学などの分野においてもつばら研究が進められてきた「語り」が有する問題、すなわち、語り手の主観性や語りの構築主義的性格、語り手と聞き手との関係性などの問題群についても歴史学の立場から一定程度の検討を行った。この方法論に関連する業績として、佐藤仁史「回顧される革命——ある老基層幹部のライフヒストリーと江南農村」山本英史編『近代中国の地域像』山川出版社、381-419頁、2011年、がある。

(5) 以上を総括すれば、近代における市鎮の機能、市鎮と社村の関係、社村内部の構成と関係など近代江南農村空間の重層性について、新たな知見を示した点が研究史上の貢献であると言える。また、極めて開放的な性質を有した江南社会が、土地改革や社会主義改造、集団化によってどのように再編されたのかに関する基礎的データを収集したことも今後の研究の展開のために必要不可欠の基礎作業であると位置づけることができる。20世紀を通じた時間軸の中で地域社会やそこに生活を営む人々のあり方を分析するという視点から、より高い次元で中国農村社会史研究を進めるための基礎作業を進めたと評価することができよう。

本研究課題で得た成果を踏まえた今後の展望は次の2点である。

①市鎮社会や農村社会がどのように再編・改造されたのか、再編・改造に際して伝統中国期の社会構造とはどのように参照されたり克服されたりしたのかを、1950年代～1960年代の集団化時期を中心に検証する必要性である。もっとも重要な作業は県級檔案館・図書館における史料収集と分析である。これに加えて、すでに収集した各種の地方文献を相互参照することによって、もつばら制度面での変遷を明らかにすることができよう。

②しかしながら、中国建国後の公文書に現れる史実とは、地域社会の実態そのものというよりも当為としての側面が極めて濃厚である。したがって、文献史料に反映された「史実」がどの程度実態を反映しているかについては、現地調査による検証が不可欠である。

口述調査も決して万能ではなく、主観や記憶違いによって「史実」とは言いがたい内容も含まれる可能性が高い。特に中国建国後においては、異なる立場・階級によって「語り」が大きく左右される。したがって、定点観測村落においては、異なる立場・階級の話し手に口述調査を実施し、当該歴史過程に対する

様々な声を拾うことによって立体的な地域史像の構築を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 佐藤仁史「回顧される革命——ある老基層幹部のライフヒストリーと江南農村」山本英史編『近代中国の地域像』山川出版社、381-419頁、2011年、査読無し。
- ② 佐藤仁史「清末における城鎮郷自治と自治区設定問題——江蘇蘇属地方自治籌辦処の管轄地域を中心に」『東洋史研究』第70巻第1号、127-165頁、2011年、査読有り。
- ③ 佐藤仁史・太田出「中国近現代口述史における「語り」とオーラルヒストリー資料」岩本通弥・法橋量・及川祥平編『オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて——文化人類学・社会学・歴史学との対話』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、69-82頁、2011年、査読無し。
- ④ 佐藤仁史「フィールドワークと近現代江南農村——太湖流域社会史調査に即して」高田幸男・大澤肇編『新史料からみる中国現代史——口述・電子化・地方文献』東方書店、7-29頁、2010年、査読無し。
- ⑤ 佐藤仁史「民国期江南の廟会組織と村落社会——吳江市における口述調査を中心に」『近きに在りて』55号、57-70頁、2009年、査読無し。

[学会発表] (計10件)

- ① 佐藤仁史「民間信仰からみる近代江南社会と華北社会——祠・廟を中心に」、東洋文庫シンポジウム「華北の発見」、2012年2月12日、東洋文庫(東京)。
- ② 佐藤仁史「オーラルヒストリーからみる民国期江南農村——ある元「富農」の語り」、立命館大学経済学会セミナーシリーズ「近代中国農村社会経済史の研究」、2012年1月31日、立命館大学。
- ③ 佐藤仁史「日本的近代中国農村史研究與田野調査：以江南為中心」、中国社会的歴史人類学中期学術會議、2011年8月25日、香港中文大学(中国)。
- ④ 佐藤仁史「從民間信仰看近代江南和華北的農村社会：以香頭・会首為中心」、香港中文大学主催「太湖流域市鎮与鄉村聚落歴史学術研討会」、2011年1月10日、浙江省湖州荻港村荻港魚莊(中国)。
- ⑤ 佐藤仁史「從田野調查看近現代江南農村的“生活世界”：民間信仰與基層社會關

係」、第4回日韓兩地域中国近現代史研究者交流会、2010年1月9日、東京学芸大学。

〔図書〕（計1件）

- ① 佐藤仁史・太田出・藤野真子・緒方賢一・朱火生編著『中国農村の民間藝能——太湖流域社会史口述記録集2』汲古書院、2011年、448頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 仁史 (SATO YOSHIFUMI)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：60335156